北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

ヘンリー・ジェイムズの『デイジー・ミラー』：マナーズの問題を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 仙一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003613

北海道教育大学紀要（第1部A）第40巻　第1号
Journal of Hokkaido University of Education (Section I A) Vol. 40, No. 1

平成元年10月
October, 1989

ヘンリー・ジェイムズの『デイジー・ミラー』

――マナーズの問題を中心に――

伊　藤　仙　一

1

はじめに，James W. Tuttleton の *The Novels of Manners in America* から引用する．

> James's ambivalent feeling about America led him to crissoross the Atlantic in the early 1870 s, testing his impressions of the viability of the Old World and the New as subject and setting of his art.(1)

Tuttleton はつぎのように主張する．James は，彼の生まれ育った環境からいっても，アメリカにたいし，ambivalent な感情をもっていた．その感情に突き動かされて，1870年代の初期において，彼は太西洋をはさんだ両岸を往復することになったが，そのとき，彼は新世界と旧世界に関係するもののうち，作品の主題や場面設定に生かしえるものはないかと，いろいろな考えを吟味していたと．この本の題名が *The Novels of Manners in America* であることと，その本の冒頭において，Tuttleton が Trilling の manners 論に言及していることなどを考えると，(2) 彼は James の探しあてたものは，他の数人のアメリカの作家と同様に，manners の問題であったといっているようにみえる．この問題は，また，アメリカの小説において，再吟味を必要とする大きな問題でもある．

Daisy Miller : A Study (1878) は manners を扱った小説である．Tuttleton のいう The Novels of Manners の範疇にはいる．この小説では，それぞれの地域の風俗や習慣の比較対照や，それらを担った登場人物の葛藤が drama のように展開していく．manners とは特定の時代の，ある特定の社会における風俗習慣であるから，同じ風俗習慣でも地域によって異った反応を引き起こすことが考えられる．そして，この場合の「地域」はその当時の現実の actuality を髣髴とさせるものがある．

つぎに，この小説にはふたつの層がある，という見解について言及してみたい．それによると，*Daisy Miller : A Study* には，風俗習慣の comedy が演じられている層と，風俗習慣とはかけはなれた形而上の世界といってもよい自然の世界の層との，ふたつの層があるといわれる．俗と自然の両世界を所有することができ，俗の世界を離れて自然の世界へ移っていけるのは，女主人公の Daisy ただひとりである．小説の進行に伴って，Daisy が自然の世界へ移っていく場面が，しばしばみられるようになる．Daisy が新緑に包まれたローマ遺跡のなかを散策する姿などは，自然の世界に属する彼女の典型的な姿といわれる．こうした見解の持主は，Carol Ohmann である．(3)

Kenneth Graham も，Daisy がみせる二面性を強調している点では同じである．(4) この二人の批評家と，筆者との意見の相違について述べてみたい．彼らは積極的に，Daisy にふたつの面があることを強調している．筆者はあくまで，この小説を manners の面から考えていきたい．自然は manners の drama が演じられる背景になっているに過ぎないことと，manners の世界を遠景として眺

めるときに，そこに自然の世界が存在しているようにみえるのであって，自然の世界が独自に存在しているわけではないこと，この二点を筆者は強調したいと考えている．この小説は manners の比較対照の小説である．この比較対照の drama に登場する Winterbourne は，自分もその drama のなかで役割を演じると同時に，自分の目でこの drama を見，想像し，判断していく．この小説の最後における彼の判断は，moral を志向しているといえる．

2

この作品において，Daisy が付き添いの女性のないまま，あちらこちら歩きまわることで，ヨーロッパにきているアメリカ人たちから，非難を受ける場面によく出会う．

そこで，付き添いの女，chaperone の意味を O. E. D.で調べることから始める．O. E. D.によると，つぎのようになっている．

> 3. *fig*, A person, esp. a married or elderly woman, who, for the sake of propriety, accompanies a young unmarried lady, as guide and protector.

この意味ではじめて用いられた例文を，他のもう一つの例文とともに引用する．

> 1720 Mrs. DELANY *Autobiog.* I. 66 She.. begged I would be her chaperone when she went to public places.
> 1864 N. & Q. Ser. III. V 280/2 Chaperone.. when used metaphorically means that the experienced married woman sheltered the youthful debutante as a hood shelters the face.

chaperone とは，若い未婚の女性に保護者として付き添っている年配の女性のことである．

このほか，E. M. Forster の *A Room with a View* にも，chaperone がどんなものであるかを示す一例がある．英国からイタリアのフローレンスに観光にきた未婚の女性 Lucy が伯母の Miss Bartlette の付き添いもなしに，人通りのなかへいこうとして，Mr. Beebe に厳しくとがめられるというのが，それである．(5) このように，人前では若い未婚の女性は chaperone の保護を受けねばならないということが，ヨーロッパの歴史のなかで，守らねばならない manners となっている．

それでは，この chaperone という風俗習慣がヴェヴェーとローマ，ヨーロッパのそれぞれの地域でどのような葛藤を醸しだすかみてみよう．

はじめに，ヴェヴェーで，Winterbourne と Daisy が夜の 11 時頃，ボートでレマン湖へ漕ぎ出る約束を交わしている場面を引用する．

> "Oh, Eugenio," said Daisy, "I am going out in a boat!"
> Eugenio bowed. "At eleven o'clock Mademoiselle?"
> "I am going out with Mr. Winterbourne. This very minute."
> "Do tell her she can't," said Mrs. Miller to the courier.
> "I think you had better not go out in a boat, mademoiselle," Eugenio declared.
> Winterbourne wished to Heaven this pretty girl were not so familiar with her courier,

but he said nothing.

"I suppose you don't think it's proper!" Daisy exclaimed. "Eugenio doesn't think anything's proper."

"I am at your service," said Winterbourne.

"Does mademoiselle propose to go alone?" asked Eugenio of Mrs. Miller.

"Oh, no ; with this gentleman?" answered Daisy's mamma.

The courier looked for a moment at Winterbourne —— the latter thought he was smiling —— and then, solemnly, with a bow, "As mademoiselle pleases!" he said.

"Oh, I hoped you would make a fuss!" said Daisy. "I don't care to go now."

"Oh, I myself shall make a fuss if you don't go," said Winterbourne.

"That's all I want — a little fuss!" And the young girl began to laugh again. (4, p. 166)

Daisy は，従僕の Eugenio に向かって，どうしても，Winterbourne といっしょに，ボートで沖に漕ぎでるのだという．Eugenio が彼女をいかせまいとしているあいだは，彼女はしつように我を通そうとしていたが，彼が好きなようにしなさいと，承諾の意を示すと途端に，彼女は Winterbourne とのボートの約束をひるがえしてしまう．彼女は Eugenio が騒いでくれればそれでよかったのである．Euginio が proper だと考えている chaperone という伝統的 manners を守ろうとする立場からみれば，彼女が約束を断わったのは，それに適った行為である．しかし，彼女から，ちょっとした騒ぎ a little fuss を起こしたかっただけだったという発言を聞くと，彼女は manners のことなど，最初からまったく念頭になかったことになる．もし，Winterbourne が Daisy のこの態度を失礼だとなじるならば，なじられなければならないのは，むしろ，winterbourne の方であろう．夜更けに，付き添いの女性もなしに未婚の若い女性を誘って，湖上に出ようとすること自体，manners に反することであるから．

彼はなぜこのように，manners の枠を踏み越えて，自由に振るまえるのだろうか．彼のヨーロッパでの滞在の地ジュネーヴは，カルヴィン派の根拠地で，一面においては，戒律の厳しい都市として知られており，そこで教育を受けている彼は，みず知らずの女性に話しかけることさえ，許されないことと考えているはずである．それなのに，彼がこのように自由な態度がとれたのは，たまたまやってきたこの町の自由な雰囲気に起因する．彼は，それに触れ，つい自由な気持になり，彼女にこの申し込みをおこなったものと思われる．そうだとするなら，彼女の勝手気儘な態度をなじるよりは，一旦は申し込みを受諾してくれたことにたいして，感謝の念を表すほうが自然であろう．

しかし，自由な気分に浸っている彼からみても，彼女はあまりにも，気儘で，subjective なところの多すぎる女性で，He was indeed puzzled と彼は当惑ばかりしている．

一連の manners の comedy は明るく，コミックに展開していくが，それは，この地が国際的な観光地で，自由な雰囲気があることに起因している．ヴェヴェーは，かつては，ローマへ通じる街道の一駐屯所として，占領，流血，放火，疫病そのほか，いろいろの苦しみを味わってきた．また宗教改革に荷担したベルンの厳しい法の影響化に立たされたこともあった．ヴェヴェーは 19 世紀初頭になってはじめて，スイス連邦のなかで自立の道を歩むことができた．その頃から保養地として，世界から人気を集めるようになった．この町の向こうには，日光に照らしだされた the Dent du Midi の頂上と the Castle of Chillon がみえている．the Castle of Chillon には，かつて，Bonnivard が幽閉されていたが，彼は自由のために戦った勇士であった．19 世紀において，このあたりを訪れた詩人や文人たちは，この土地が醸しだす，美と自由な雰囲気に圧倒され，感動して，多くの詩文を

残したという．こうした事情については，Deakin が詳しく述べている．[6] Winterbourne が，Daisy と二人だけで遠出ができたのも，この地の雰囲気のなかで，彼が manners に気を使うことなく，未婚の女性にその申し出をすることができたからである．

つぎに，ローマではこの manners はどのような展開をみせているか検討してみたい．ローマにやってきた Winterbourne は，Walker 夫人を訪問する．彼女はこの地で作られているアメリカ人社会の manners と，ローマ人の伝統的 manners との両方に，気を配りながら生活している女性である．彼は夫人の家に，たまたま居合わせた Daisy と出会う．Daisy は，これからイタリア人の Giovanelli と会うために，ピンチオ公園へと出かけようとしている．そこまでの道のりを同行してくれるようにと依頼されて，彼は彼女に同行して，人通りの多いグレゴリアーナ通りをいく．二人が Giovanelli に出会い，三人になってからも彼女をまんなかにしてなお歩き続けていく．Walker 夫人が馬車で追いかけてきて，winterbourne と Daisy に向かって，すぐこの馬車に乗るよう忠告する．その場面を引用したい．

> "You are old enough to be more reasonable. You are old enough, dear Miss Miller, to be talked about."
>
> Daisy looked at Mrs. Walker, smiling intensely. "Talked about ? What do you mean ? "
>
> "Come into my carriage and I will tell you."
>
> Daisy turned her quickened glance again from one of the gentlemen beside her to the other. Mr. Giovanelli was bowing to and flow, rubbing down his gloves and laughing very agreeably ; Winterbourne thought it a most unpleasant scene. "I don't think I want to know what you mean," said Daisy presently. "I don't think I should like it."
>
> Winterbourne wished that Mrs.Walker would tuck in her carriage-rug and drive away ; this lady did not enjoy being defied, as she afterwards told him. "Should you prefer being thought a very reckless girl ? " she demanded.
>
> "Gracious me ! " she exclaimed. (4, p. 184)

未婚の女性が chaperone の付き添いもなしに，男性と出歩くことが，ここでも問題とされている．chaperone が付き添っているかいないかといった些細にみえることにでも，Walker 夫人は気を配っている．彼女はヨーロッパに長く滞在していて，社交界で生きていくために，manners がどんなに重要なものであるかよく知っている．彼女は Daisy にそれに従って生きていくようにと忠告するつもりで，reasonable でなければいけないと，たしなめている．アメリカのスクネクタデイに生まれ育った Daisy は，自由の気に富み，純真無垢そのものであるので，こうした既成の manners に組する忠告に激しく反抗する．旧世界の manners を肯定する力と，これを否定する力が，ここで激しく争っている．manners は，歴史的時間のなかで特定の場所に強く根づいているから，これを是認させようとする力は強大である．*The Portrait of a Lady* の Pansy や *The Awkward Age* の Nanda を例として考えてみよう．文明が熟せば熟すほど，社交界は華やぐであろう．既婚の男女がそのなかで快楽を求めれば，それだけいっそう，若い未婚の女性にたいする規制は厳しくなり，manners にたいする絶対的服従を求めてくる．それに，従容として服従していく姿勢が，Pansy と Nanda にはみられる．これほど強大な manners の力を否定，無視しようとする Daisy の抵抗は，あ

るいは無駄であるかもしれないが，Daisy はそれを試みている．Winterbourne には，Giovanelli のペコペコと愛想を振り撒いている態度だけが気がかりである．彼はそれを the most unpleasant だと認識しているが，manners を中心にした，ふたりの女性の闘争などは視野に入っていない．Daisy は，ヴェヴェーのときと比較して，ずっとかたくなになってしまっているが，こんな状態の Winterbourne には，彼女の態度を文明の actuality と関係させて認識する能力などは存在しない．彼は Walker 夫人の判断に従うようにと，Daisy を説得することくらいしかできないであろう．このように，manners にたいする反応は，地域を異にすることによって現われかたが変化するのである．

3

つぎに，Daisy にはふたつの層がある，といわれていることについて言及したい．前半のヴェヴェーにおいて，Winterbourne が，Daisy に，伯母の Costello 夫人を紹介すると約束する場面がある．しかし，Costello 夫人は，彼女に会うことを拒絶してしまう．彼が Daisy に，その言い訳をしている場面を引用する．

> Winterbourne was embarrassed. "She would be most happy," he said ; "But I am afraid those headaches will interfere."
>
> The young girl looked at him through the dusk. "But I suppose she doesn't have a headache every day," she said, sympathetically.
>
> Winterbourne was silent a moment. "She tells me she does," he answered at last —— not knowing what to say.
>
> Miss Daisy Miller stopped and stood looking at him. Her prettiness was still visible in the darkness ; she was opening and closing her enormous fan. "She doesn't want to know me!" She said, suddenly. "Why don't you say so ? You needn't be afraid. I'm not afraid!" And she gave a little laugh.
>
> Winterbourne fancied that there was a tremor in her voice ; he was touched, shocked, mortified by it. "My dear young lady," he protested, "She knows no one. It's her wretched health."
>
> The young girl walked on a few steps, laughing still. "You needn't be afraid," She repeated. "Why should she want to know me ?" Then she paused again ; she was close to the parapet of the grden, and in front of her was the starlit lake. There was a vague sheen upon its surface, and in the distance were dimly-seen mountain forms. Daisy Miller looked out upon the mysterious prospect, and then she gave another little laugh. "Gracious! She *is* exclusive!" she said. (4, pp. 159-60)

Graham は彼女の立っているテラスの向こう側 behind the terrace を問題にする．[7] 向こう側には，こちら側とは異なった世界が存在している．神秘的な湖があり，それが Chateau de Chillon や Dent de Midi にも続いている．Daisy はせんすを開いたり閉じたりするが，せんすの背後には，夜の湖と同じように，彼女の神秘の姿が隠されている．Daisy が Costello 夫人の迫害を受けたとき，はじめて，せんすの背後にある神秘が垣間みられるのであるが，それは垣間みられるだけで，その

核心に触れることはできないのである．このように behind the terrace を重要視する Graham には，はじめから，神秘的な美しい Daisy が世俗的な Daisy の裏がわに隠されているようにみえるのである．筆者は，つぎの二点において，Graham とは意見を異にしている．ひとつは，湖が神秘的であるからといって，それが彼女に神秘性を与えることにはならないということである．彼女が the mysterious prospect を眺めているからといって，彼女の内側が mysterious だということにはならないからである．つぎには，Daisy は常に美しく，美しさが隠されていることなどは，はじめからなかったということである．Winterbourne にとって，彼女が謎めいて訳が分らなくなるのは，彼女の態度が現実的になったかと思うと哲学的になったり，客観的になったかと思うと主観的になったり，たえず変動するようにみえるからである．彼女は神秘的ではなく，Winterbourne にとって，謎めいてみえるに過ぎないのである．

この小説の注のつけかたでは，The World's Classics[8] が Penguin Classics[9] や A Noton Critical Edition[10] に比較して優れている．他の二書にはみられない注がつけられているからである．The World's Classics の注のなかで，ジュネーヴについては，James also knew it as the city of Voltaire, Rousseau, Gibbon, and Madam de Stäel. と書かれている．このことは，Winterbourne は，ジュネーヴのプロテスタント的側面と，これら文人たちが醸しだす自由な側面とを合わせもっていることを意味している．また，Costello 夫人が住んでいたニュー・ヨークの 42 番街については，そこが 19 世紀後半において，この町のエリートたちが住む baroque brownstone mansions の地域であったことと，Edith Wharton の *Old New York* (1924) を参照せよということが書かれている．このことは，Costello 夫人が，ヨーロッパの伝統的 manners にほぼ等しいまでに作りあげられた，ニュー・ヨークの manners を身につけていることを意味している．

Costello 夫人が，Daisy に会うことを拒絶するのは，Daisy がこうした manners に従おうとしないからである．Winterbourne が伯母の側に立ちながらも，Daisy に共鳴できるのは，彼がジュネーヴという地に遊学して，この両者の考えをおぼろげながら理解できるからである．上記引用文のなかで，彼は Daisy に向かって，三度，伯母が頭痛のために彼女に会えないのだと，言い訳をしている．二度目に，彼が言い訳をしたときの彼女の様子 Her prettiness was still visible in the darkness ; she was opening and closing her enormous fan. と説明されているが，それは，彼女の神秘的な美しさや，隠れた暗い部分が，せんすの動きのすきまからみえ隠れするということではない．彼女は昼間も美しいが夜目にもその美しさはみてとれたという，ただそれだけのことである．せんすをあおぐことによって，彼女の神秘性があらわれてくるのではなく，こちらからみている Winterbourne には，せんすの動きもみてとれたということである．せんすの動きによって表現されるものが，彼女の苛立ちなのか，寛大さのなのか，はっきりしないが，この動きによって彼は，彼女をますます美しく感じるようになったとだけはいえよう．Daisy も，三度，Winterbourne に向かって，Costello 夫人には，Daisy と会う意志はまったくないという本当の事実をいってくれるように頼んでいる．そう依頼しながら，彼女は the mysterious prospect をみつめているが，それもみつめる対象の神秘性がみつめる彼女に乗り移るのではなくて，その光景をみつめている彼女を見て，Winterbourne が彼女にたいして，すまないという意識をもつようになっていくという意味である．光景は manners の drama に連続してはいるが，あくまでもその背景となっているのである．このように考えてくると，この作品は，manners を中心にして展開しているということがわかる．“Gracious! She *is* exclusive!” という Daisy の言葉は，Costello 夫人の manners についての考えを痛烈に批判している言葉である．

つぎに，この小説はときには，manners を離れて形而上的自然の世界を表現しているという議論を検討してみたい．自然の世界をもっともよく表現していると思われる文章をつぎに掲げる．

> Winterbourne stood there ; he had turned his eyes towards Daisy and her cavalier. They evidently see no one ; they were too deeply occupied with each other. When they reached the low garden-wall they stood a moment looking off at the great flat-topped pine-clusters of the Villa Borghese ; then Giovanelli seated himself familiarly upon the broad ledge of the wall. The western sun in the opposite sky sent out a brilliant shaft through the couple of cloud-bars ; whereupon Daisy's companion took her parasol out of her hands and opened it. She came a little nearer and he held a parasol over her ; then, still holding it, he let it rest upon the shoulder, so that both of their heads were hidden from Winterbourne. This young man lingered a moment, then he began to walk. But he walked — not towards the couple with the parasol ; towards the residence of his aunt, Mrs. Costello. (4, p. 187)

Ohmann は，This scene links Daisy with the natural world, and links her with that world, more closely than any other scene James has so far given us. And it suggests that the distance between Winterbourne and Daisy is greater even than the distance that separates artificial from natural manners, greater than the distance that separates restraint from free self-expression.[11] だという．この光景は，もっとも自然と結びついている場面だという，Ohmann の意見は納得のいくものである．しかし，このことが，Daisy から Winterbourne までの距離は，自由な自己表現の世界から manners による束縛の世界までの距離よりも，大きいことを暗示していると，Ohmann がいうとき，その意見は容易に納得しがたいものとなる．Ohmann は，この場面での Daisy が自由の世界を超越して自然の世界に没入し，同時に彼も manners の世界を抜けでて，自然からいちばん遠い地点までやってきている，と主張している．これにたいして，筆者は彼女は常に自由の世界のなかにいると考える．彼女はヨーロッパの manners の世界に抗議し，自由の世界を強調するために，自然の世界を利用しているに過ぎないと考える．

遠くにみえる彼女は美しく，雲間から斜めにさしこむ午後の日の光のなかで，Giovanelli と無邪気に遊び戯れているようすをみていると，彼女はいま，自由や manners の世界を超越して自然に没入しているようにみえる．しかし，筆者はこの小説の流れを考えなければいけないと考える．さきに，Walker 夫人に，未婚の女性は付き添いの女性なしに，男性と一緒に人前をみだりに歩いてはいけないと叱責されて，それが，どうしてそんなに悪いことなのかと，Daisy が激しく抗議した場面を取り上げた．その場面のすぐあとに，この自然の場面が展開している．Winterbourne は，一度は Walker 夫人の忠告で馬車に乗ってはみたものの，Daisy のことが心配になって途中で下してもらい，彼女のあとを追ってここまできている．こうした小説の流れからすると，この場面で，Daisy は自分の自由な自己表現の世界が，manners の力で抑圧されそうになり，その怒りの発露として，Giovanelli を従えて，これみよがしに振るまっていると読むのが適している．彼女は，自分が自由であることの証として，自然のなかで自由に振るまっているのである．彼女が自然へ触合するのではなく，自然が彼女の行動の背景になっているのである．Daisy はパラソルで Winterbourne の視野をさえぎり，彼から二人をみえなくさせてしまうが，それは，彼女が彼のきていることに気がついており，すでに，彼を manners の世界に属する人間と判断していたためである．Winterbourne はこうした彼女

の一貫性のある姿勢を見抜けず，彼女の行為について訳が分らなくなって，仕方なく Costello 夫人のもとへ戻っていく．ヴェヴェーで，Daisy を夜目にも美しいと思い，同情をよせていった Winterbourne が，この地では彼女を同様に美しいとは思うものの，彼女の行為に関しては，訳が分らなくなってしまっている．ヴェヴェーとローマの，それぞれの地域によって，彼女の抵抗の激しさの相違は，ヴェヴェーとローマの，それぞのの社会の actuality の相違に起因していると思われる．

いまひとつ，同じように形而上の世界に彼女が浸ってみえるような場面を引用する．

> A few days after his brief interview with his mother, he encountered her in that beautiful abode of flowering desolation known as the Palace of the Caesars. The early Roman spring had filled the air with bloom and perfume, and the rugged surface of the Palatine was muffled with tender verdure. Daisy was strolling along the top of one of those great mounds of ruin that are embanked with mossy marble and paved with monumental inscription. It seemed to him that Rome had never been so lovely as just then. He stood looking off at the enchanting harmony of line and colour that remotely encircles the city, inhaling the softly humid odours and feeling the freshness of the year and the antiquity of the place reaffirm themselves in mysterious interfusion. It seemed to him also that Daisy had never looked so pretty ; but this had been an observation of his whenever he met her. Giovanelli was at her side, and Giovanelli, too, wore an aspect of even unwonted brilliancy. (4, p. 198)

Ohmann は And the beauty of natural world —— the world to which Daisy belongs —— is supreme.[12] という言葉で，Daisy の属している manners とはかけ離れた，〔超越的〕自然の世界があり，それは，Daisy が所属できる世界であり，最高のものだといっている．

つぎに，筆者がこの場面をどのように考えるかを示しておきたい．最初の，A few days after... から ...with monumental inscription. までは，作者によって光景は遠景として提示されている．この光景は微細に描写されたものではない．総括的に，絵模様でも描くように描写されている．早春のはなばなの芳醇な薫りが漂い，そのなかを Daisy が散策している．作者によって提示されたこの世界を Winterbourne もまた眺めていて，彼に，それがどうみえているかが説明されている．光景については，It seemed to him that... 以下，...just then. までに説明されていて，彼には光景が，作者が提示しているのとまったく同様に，すばらしいものとみえているのである．しかし，散策している Daisy は，彼にどのようにみえているのであろうか．It seemed to him also that Daisy had never looked so pretty ; but this had been an observation of his whenever he met her. をみると，なるほど Daisy の姿も彼にはすばらしくみえていることが了解されるが，しかし，彼が彼女に出会ったときは，いつもそのような印象をもっていたと，作者が説明しているのを聞くと，光景のすばらしさによって彼女がすばらしくみえるのではなく，光景とは無関係に彼女は常にすばらしいということが分ってくる．manners にたいする抵抗の激しさの度合によって，彼女の態度が変化するだけである．彼のほうがそれに戸惑うのである．この場面で，彼女はひとりで歩いている Winterbourne に，ひとりでいて寂しくはないかとからかい，彼が manners を守っていることを皮肉っている．これにたいして彼も，彼女のような未婚の女性が，婚約もしていない男と出歩くことを非難する．それではと，彼女は "I *am* engaged." と，でまかせをいい，"Yes, I believe it!" と彼が答え

ると，…."Well then——I am not 〔engaged〕." (4, p. 200) と前言をひるがえしてしまう．ここにもまた，chaperone がいる，いないという，manners の問題が浮びあがってきている．このように考えてくると，遠景としてみたとき，形而上的な自然の世界とみえても，そのなかでは manners の葛藤が演じられており，光景はその葛藤の drama の背景になっていることが了解されよう．そして光景の美しさが葛藤の drama を引き立たせているのである．

5

われわれが Daisy が確実に死に向かって進んでいくと予想できるのは，19 世紀のローマ社会のある actuality が彼女を覆っているからである．当時において，コロシュームに発生するマラリヤ蚊によるマラリヤ熱のため，観光客はおおいに悩んだという．[13] Daisy が Giovanelli を従えて，コロシュームにやってきたのは，彼女がただ天心らんまんに自由に振るまいたかったからかもしれない．しかし一方では，死をも呼び込むほどの actuality に，身を浸すことで自分の自由の権利を主張し，manners にたいして，抵抗の姿勢を示していたともいえる．Winterbourne は彼女が，本当にはすっぱ娘なのかどうか，見当がつかなくなっていき，ついには，根っからのはすっぱ娘だと，断定してしまうほどである．

彼女が死の間際になって，自分はだれとも婚約していなかったことを，Winterbourne に伝えてくれるようにいい残して死んでいく．その話を間接的に聞いたとき，彼は，彼女がやはり美しく，純真無垢であったと再確認するのである．

最後に彼女の墓地の光景を引用する．

> But, as Winterbourne had said, it mattered very little. A week after this the poor little girl died ; it had been a terrible case of the fever. Daisy's grave was in the little Protestant cemetery, in an angle of the wall of imperial Rome, beneath the cypresses and the thick spring-flowers. (4, p. 205)

ここには，ペーソスが満ちあふれている．彼女が葬られているこの墓地には，カトリックの異国の地でなくなったひとびとも葬られている．Keats も Shelley もこの墓地に埋葬されている．Tiber 川で 1824 年に溺死したという Miss Bathurst の墓碑名もそこに建っていて，訪れる人々の涙を誘うという．[14] Daisy's grave was in the little Protestant cemetery, in an angle of the wall of imperial Rome, からも同質のペーソスが感じられる．しかし，そのペーソスは，a metaphysical figure に超越していった，Daisy から感じられるところのそれではなく，ローマの地で，manners と戦い，死に導かれていった Daisy から感じとられるところのペーソスである．

6

Preface で彼はこの作品の人物は pure poetry であり，imagination はそれを目指すものといっているところがある．[15]

しかし，Preface は 1909 年の New York Edition に付されたものであることを念頭に置く必要が

ある．この作品が，はじめて Cornhill Magazine に載ったのは 1878 年である．[16] James が自分の芸術観を確立したといわれたのが，1888 年に出版された，*Partial Portraits* のなかの "The Art of Fiction" であるといわれている．[17] James は自分の芸術観の確立しない以前の作品までも，1909 年の時点へと，すなわち，後期の芸術観へと，引き寄せるようにして Preface を書いたといえよう．

この論文は，この小説を pure poetry としてではなく，国際性の小説群のなかのひとつとして扱ったものである．その場合，manners が問題となってくる．この論文で試みたように，manners をその当時の社会の actuality と関連させてみると，Daisy の姿が比較的鮮明に浮びあがってくる．James によって選ばれ，見る役目を与えられた Winterbourne が，その対象について，なにを想像し，判断していくかということがつぎの問題となる．彼が，Daisy について，"....I was booked to make a mistake. I have lived too long in foreign parts." (4, p. 206) と述懐するとき，彼は自己と対象について，ある判断を下している．かりに，このように判断することを同定することと呼ぶと，Winterbourne は *The Portrait of a Lady* の Isabelle に連動していく人物である．Isabelle もまた，対象と自己について，絶えず判断を重ねていく人物である．

注

引用は *The Complete Tales of Henry James ed. Leon Edel* (*London : Rupert Hart-Davis,* 1962) により，巻数，頁数も同版に基づく．Mr. Mrs. の表記については注 (10) の Norton 版に従った．

(1) James W. Tuttleton, *The Novels of Manners in America* (Chapel Hill : The Univ. of North Carolina, 1972), p. 48.
(2) *ibid*., p. 8.
(3) Kenneth Graham, *Henry James The Dramatic Fulfilment* (Oxford : Clarenden Press, 1974), pp. 15-28.
(4) Carol Ohmann, "Daisy Miller : A Study of Changing Intentions," *American Literature* XXXVI (March 1894), pp. 1-11.
(5) E. M. Forster, *A Room with a View* (Middlesex : Harmondsworth, 1953), pp. 43-44.
(6) Motley Deakin, "Two Studies of *Daisy Miller*," *The Henry James Review* V (Fall 1983), pp. 2-28.
(7) Graham, pp. 20-21.
(8) Henry James, *The Daisy Miller and Other Stories* ed. Jean Gooder (Oxford : Oxford Univ. Press, 1985), pp. 270-76.
(9) Henry James, *Daisy Miller* ed. Geoffrey Moore (Middlesex : Harmondsworth, 1986), pp. 119-66.
(10) Henry James, *The Tales of Henry James* ed. Christof Wegelin (New York : Norton, 1984), pp. 3-50.
(11) Ohmann, p. 8.
(12) *ibid*., p. 9.
(13) Moore, p. 74. Deakin, p. 12.
(14) Gooder, p. 24. Deakin, p. 12.
(15) Henry James, *Daisy Miller Pandora The Patagonia and Other Stories* (New York : Charles and Scribner's Sons, 1937), p. viii.
(16) Cf. Leon Edel and Dan H. Lawrence, *A Bibliography of Henry James* (Lodon : Rupert Hart-Davis, 1961), p. 324.
(17) Cf. Henry James, *Partial Portraits* with introd. Leon Edel (Ann Arbor : The Univ. of Michigan, 1970), pp. xiii-xiv.

(本学助教授　旭川分校)